

豊宮崎文庫の創設における権威の伝承と教化の問題について——度会延佳を中心に——

鈴木孝子

序論 問題の設定

学問への希求は、追究すべき主題が明確である程強くなるものではないか。時として知的な渴仰が共同の学びの場を作り出す事もある。慶安元年（二六四八）に創設された豊宮崎文庫は、その様な知的な要求に呼応する文化事業であると言える。この文庫は度会延佳（一六一五—一六九〇）、與村弘正、岩出末清、青山正清等が中心となり、七十名より成る「文庫籍中」という運営団体を形成の上で創設された。籍中のメンバー達は三年間毎年一兩ずつの資金を積み立てて書籍購入等の運営費に充て、更に文庫令状を制定し

明確な規約の下に書庫の管理運営を行ったのである。この文庫は書庫と講堂から成り、講堂は外宮祠官子弟の修学の場として用いられていた。この文庫に対する賛同者は多く、紀州藩の儒者永田善斎が「宮崎文庫記」を、林羅山が「題伊勢文庫之記」等を送り、寛文元年（二六六一）に山田町奉行八木但馬守が文庫の永代修理料として二十石の采地を寄附した。それ以外にも全国から多くの書籍が寄贈され、著名な学者が訪れて講演する事も多かったのである。^①

これらの事実から、豊宮崎文庫が明確な運営方針に従って図書館と研究機関としての活動をしてきた事が窺える。それではこの文庫の活動理念は如何なる趣旨のものであったのであろうか。この問題を解明するためには、創設者自

身の意向と当時の時代背景とを整理する必要がある。この論文においては創設者達の中でも中心的な役割を果たし、伊勢神道中興の祖としても名高い度会延佳を中心に考察を深めていく事にした。度会延佳の著作を通して、彼が何故に書庫と教育の場の必要性を痛感し、何を文庫の活動に託したかを主軸に検証を進める事が問題解明のために有意義であると考えられるからである。また、文庫の創設に至る過程を探るためには、慶安元年以前の時代背景に焦点を当て、何が創設の気運を高めたかを整理する事も重要である。それを通してこの文庫の創設された意義もより明らかにされるからである。

最初に先行研究における豊宮崎文庫の位置付けを整理し、次いで文庫創設に対する当時の反響を調べ、更に度会延佳の著作の検証をし、最後に延佳の意識に大きな影響を与えたと考えられる出来事を幾つか取り上げていく事とする。それを通して豊宮崎文庫の創設に対する考察が少しでも深められれば幸いである。

第一章 先行研究における豊宮崎文庫

先述の通り、豊宮崎文庫は伊勢神宮の神職達を中心に創設された文庫であった。それでは、具体的にどの様な特性

を持つ文庫であったのであろうか。最初に書誌学・図書館学の研究における評価を見ていきたい。小野則秋は、神社文庫を奉納された書物を保存する形で発達したものと、最初から図書の利用を第一に発達したものと、二通りの型に分類して論述している。両者を比較した場合、図書の利用を第一に考えている後者は当然ながら積極的な意図を以て図書の収集を行い、活動内容も教育的な傾向を持つと小野は説明する。言うまでもなく、豊宮崎文庫は後者のタイプに当てはまる文庫である。書物を積極的に蒐集閲覧し、熱心に教育的な活動に従事し、明確な運営方針を抱いていた点からもその特徴が窺える。しかしながら、小野は豊宮崎文庫が神宮の関係者によって運営されていた以外には、神宮そのものと積極的な関わりを持たなかったと考えている。これは小野が純粹に書誌学・図書館学の立場に立つ故に出された主張であると言うべきであろう。しかし、この指摘は本当の得たものなのであろうか。一度視点を変え、度会延佳の功績の中で文庫の創立の意義が如何に解釈されているかを整理していく必要がある。

最初に戦前の研究における文庫の位置付けを総括してみよう。江見清風は豊宮崎文庫の創設を、当時としては画期的な事業であると評価し、地元の学芸の隆盛に延佳が大いに貢献した事を主張している。同様に、平出鏗一郎も文化

的な側面からこの事業を捉えている。平出は、延佳が当時の文化的な荒廃を憂い、文庫を創設して学問を奨励した事を指摘し、後に外宮方より学者を大勢輩出する基礎となつたと考えている。この様に豊宮崎文庫の創設を文化的な側面から評価する一方、創設活動に政治的な側面を強調する論考もある。しかし、文庫の創設が及ぼした公的な影響の意義は、あくまで伊勢神宮中心の立場と視点から論じられているのである。神宮の側の意向は分かるものの、神宮と他の勢力との間に如何なる力関係や利害の対立が存在したかという問題に対して具体性を伴った論証がされておらず、設立当時の全体像が見えてこないのである。

一方戦後の研究において、豊宮崎文庫の創設は主として延佳の文化的な功績として解釈されている。平重道はこの文庫創設が近世伊勢神道の復興の原点となり、延佳の業績の中で最も有意義であつたと指摘している。同様に、黒川典雄は延佳が神宮の復興の足がかりとして文庫の創設を思い立つたと考え、外宮祠官による度会神道の復興という明確な理念が掲げられていたと主張する。また、佐古一冽は、文庫の活動において、散逸していた貴重な古典籍を集め校合し、後世に伝えた事を「神書解放」として特筆されるべき功績であつたと高く評価している。

以上の様に、神宮と直接関連した思想的・文化的な側面

から文庫の創設が評価されている事は明らかである。これに対して文庫の創設を社会性の側面から論じているのが樋口浩造である。樋口は「神道を万民に開いた延佳は、今度は「学問」の助けになるものとして、書籍を万民に開いていた。延佳の思想——知の公開性の主張——は、実際の場面で働く力を獲得したのだ。……ここでは思想が社会性をもつ場面として取り上げている……」と論じている。樋口の主張する「知の公開性の主張」は、文庫の創設が持つ社会的な影響をも視野に入れた位置付けとして評価できる。そこで、この着眼点を継承して一歩進める形で論を進めていきたい。この「知の公開性」が何に触発され、何を目的としたものであつたのかを、より具体的に探っていく事とする。

豊宮崎文庫の創設が及ぼした公的な影響を見ていくには、より大きな背景と視点を設定する事が重要であろう。神宮以外の勢力の動向をも視野に入れつつ、それが如何に創設に携わった人々の意識に影響を与えたのかを探りながら考察を深める必要があるからである。他の勢力との関わりの中で、何が実際に創設への意欲を高めたのかを検証する事は、創設者達の危機感と目的意識を刺激した要因を明瞭にするために必要不可欠な課題であるからである。文庫を作る必要性は確かに当時の文化的荒廃に対する憂慮から生じ

ている。しかし、困難な状況下で一から文化事業を新たに興すには強靱な意志と実行力の双方を必要とする。単に熱意と憂慮があるだけでは、組織的なプロジェクトは成立しないであろう。集団の熱意に計画性が備わり、特定の方向性と行動指針が示された後で、初めて大規模な活動が起こるのである。以上の理由から創設活動そのものを、広い視野の中で位置付ける必要があるのである。他の勢力との関わりを通して、この文庫の創設が望まれた理由と目的意識が浮き彫りにされるからである。そしてまた、この作業を通して、当事者達に文庫の創設を決心させた内的要因がより明瞭になり、創立過程における彼らの行動指針の意味も内実も一層明確になるのである。

第二章 豊宮崎文庫創設当時の反響

それでは、豊宮崎文庫の存在は、どのような活動をする場所として記録に残されたのであろうか。まず、最初に地誌の記載から見ていきたい。

文庫ハ慶安元年戊子ニ祠堂等相議シテ高神山ノ東麓ノ豊宮崎ニ庫蔵一字ヲ経営セリ、志学ノ輩相會テ講習スルノ為ニ前ニ廂ヲ構テ学舎トセリ、凡朝家ノ史籍職書ヨリ両宮ノ神書記録又ハ歌書儒書医書雑々ノ書ニ至ル

マテ聚メ此ヲ蔵ム、但仏書ノミ制シテ蔵ス、他国ヨリ時々寄附セラル、ノ書有テ漸棟ニ充タリ、寛文元年癸丑、奉行所八木但馬守、日下部宗直公儀ニ聞達シテ領下ニ在ケル公金若干ヲ以テ、二十石ノ采地ヲ弁シ修理料ニ寄附シ給ヘリ。^①〔神境記談〕第三卷

地誌である以上、記される内容は似通っている。最初に言及するのが文庫の創設年代と所在地、創設者の名前、八木奉行による経済的な援助についてである。他にも蔵書の種類、講演者の名前等も挙げている。ここで留意すべき事は、この文庫が既に当時から書庫であると同時に講学研究の場として認識されていた点である。当時、文献を保存閲覧する書庫と教育の場がある事は何故に貴重であったのであろうか。その点を明らかにするには、文庫の創設を歓迎した人々に焦点を当てる必要がある。彼らが寄せた文庫記には、この事業が歓迎される理由が反映されていると考えられるからである。特に、林羅山が寄稿した「文庫記」には、事業そのものが喜ばれる理由が明瞭に窺えるのである。

勢州度会人、胥議相攸撰勝造書倉一寓。日本紀、神書天書、秘笈、諸家乘之類、中華之經史子集等、隋有隋得以聚蓄之。酬靈恩之万一也。欲見者来乃請守鑰者、許閱視之不許外出焉。……其慕古之趣、可以喜焉。^②

〔林羅山「題伊勢文庫記」〕

書物の閲覧が自由である事を羅山が歓迎している点に留意するべきであろう。林羅山は『本朝通鑑』序に「……以遺書難私求。故姑閣筆¹³⁾」と書いているが、彼自身も資料入手に苦勞する経験をしていたのである¹⁴⁾。

この様な事情を考慮すると、書物の閲覧が自由である点を、彼が高く評価したのも当然であつたと言えよう。羅山自身も資料収集に苦勞している以上、誰もが自由に文献を閲覧出来る施設が存在が彼の目に魅力的に映じたとしても不思議ではない。これに倣つて貴重な文献を公開する氣運が高まれば、それ以上に望ましい事はないであろう。林家の儒者がこの事業に好意的な反応を示したのも当然であつたと言えよう。だが、古典籍が公開されるようになったという事実は、単に外部の知識人にとって意義深い事ではなかつたのである。それ以前に、書物が秘匿されている現状があり、地元の神職達にも深刻な影響を及ぼしていたのである。

「倭姫命世記」の跋文には「倭姫命世記ハ古来宇治ノ蘭田家二蔵シタリト雖モ秘シテ人ニ許借セス……」とあり、この書が秘匿されて公開されていなかった事情が書き残されている。伊勢神道の教理の根幹である神道五部書の中の一冊が、自由に閲覧されなかつたという事実は深刻である。

その理由は神宮の神職達が伊勢神道の教説をより深く知ろうとする機会が最初から奪われているからである。彼ら自身が宗教的アイデンティティーを喪失する危険にさらされていたと言つても過言ではあるまい。自分達の背負う歴史や精神的なルーツを探ろうにも、着手する事が事実上不可能であつたからである。この様に書物の秘匿が支配的であつた風潮の中で、豊宮崎文庫は創設されたのである。その反響が部外者に及ぶほど大きかつた事は当然であつたと言えよう。それでは、度会延佳自身は、書物の秘匿に対してどの様な批判を展開し、文庫の活動に如何なる理念を託していたのであろうか。それを以下に検証していく事とする。

第三章 度会延佳と豊宮崎文庫

延佳自身は豊宮崎文庫の創設を次の様に記している。

慶安元年戊子度会郡繼橋郷宮崎に文庫宮建せしは、宮中に土蔵有たる例なき故、太神宮の御為神書古記和漢の書籍をあつめ、蕃代に残し、且は所の人にも学問をすゝめんためなり。……其より数十人同心して、成就の上、寛文元年辛丑には、忝も上聞に達し、官金を被下て、修理料の田地を所にて求め、永代御寄附有けり。八木但馬守殿掟を定られて、相守事になりぬ。又諸国

より心ある人は、書籍少々奉納有て、太神宮繁栄の基となりぬるも、神慮御納受のしるしなり。¹⁶（伊勢太神

宮神異記」下巻）

延佳が文庫を創設した目的は書物を蒐集保存し、後代に遺し、学問を奨励するためであったとしている。創設理念が明快で創設者自身の目的意識が高い事も窺える。書物の蒐集保存と教育活動に彼が重心を置いた理由を順に検証していく事とする。

延佳が書物を蒐集閲覧して勉強する場を作った理由は彼が展開した書物の秘匿に対する批判の中に反映されている。

問曰、和国の法も古書なければ知がたし。都鄙共に神書古書秘する子細は如何。答曰、大方私意より起たる事ならん。但秘する事もなくてはかなはぬ故あり。たとへば両大神宮にては御神体奉仕記・心御柱記などの類、他家に伝て其益なく、殊に一大事の故あれば、其職ならぬ人に深秘するは尤理なり。又中古より出たる書は両部習合の神書おほく、殊更無眼の者の所作の却而世をまどはす書なれば、秘するも理なり。かの天下にあまねくすべき神書、殊に律令格式、国史の類まで秘するは、甚邪なる事ならん。仏教は其書かくす事なく、あまねくする故に天下に流布し、神国は仏国、国人は仏奴と変じぬ。是は和国の神書、古書、邪秘して

人しらぬ故ならずや。……心あらん人はおもふべき事なり。¹⁷（陽復記）

古典籍の蒐集閲覧に力を注いだ延佳といえど、特定の書物は公にすべきでない事を認識している。しかし、彼は公開すべき歴史書までも秘匿する風潮に対して異議を唱えている。書物の非公開による弊害として、彼は興味深い指摘をしている。それは神道思想が広まらなかった事である。

それと対比する形で彼は仏教の側が書物を隠さなかった故に広く普及したと考えているのである。延佳が宗教的な隆盛を左右する要因として情報開示の有無に着目している点に注意を払うべきであろう。書物の秘匿を続ける限り、伊勢神道が優勢な状況に立つのは困難であろう。更に、延佳が展開した書物の秘匿に対する批判を見ていく。

……神書は近代の禰宜神主、又は神祇官の人までも不学者故、他家に見せては己が不学者露顕するを嫌ひて、見人も神罰あたるなり、聞人も神罰あたるなり、寫も唱るも、まして流布も神罰おそろし、など云て、諸人ををどして櫃の底に納置まゝに、蠹魚や鼠の巢となりて絶はてぬ。神書のみならず、近古より倭国の人心いやしく成て、我家の飾にせんとて、日本の記録数多たはへても他見をゆるさず、数年をふるまゝに類本もなき本朝の記録の、火難に滅したるいくらもありとぞ。

是は作者の本意にはあらず。流布すべき事をねがひてこそ撰びたるならんに、後人の私心より流布を嫌ひ忌事は、惡逆無道の所為なり。殊に代々の国史・律令・格式などまで秘書と成行まゝに、朝家の御威光も年月に添て人知る事も薄くなりぬ。さりとはなげかしき事也。^①（太神宮神道或問「下巻」）

書物の秘匿がもたらす文化的社会的弊害を彼が綿々と書き綴っている事が窺える。彼の非難は先に引用した箇所同様に、歴史書及び記録類まで隠す事と、広く流布されるべき物を家宝として独占する私意に向けられている。書物の存在意義は、所有ではなく、内容を学ぶ事にこそ有るのである。しかし、ここで興味深い見解が記されている事に留意すべきである。それは、彼が書物の秘匿と朝家の威光の低下とを関連させて主張している事である。神聖な由緒も、威光も、人に受容され承認された後に始めて効を奏するのである。延佳の胸中では、神聖性の所在を知る事こそ、崇拜の一步であるとする図式が想定されていたと言える。神聖な權威の所在を知ることから、尊重されるべきものを保全する態度も秩序も形成されていくのである。この点に留意すると、由緒に対する無知は価値体系の混乱を招くものとして警戒されている事が理解できる。書物の秘匿に対する辛辣な批判が展開された理由は以上のような意識が濃

厚であつた事情によるのである。類似した見解は別の箇所にもある。

我神宮領も世々を経て仏寺のみ盛になり、末社などは名のみ残て畑と成、田にすかれけるにや、あとかたもなく、其所慥にしれる人なきも多し。かく成もてゆくも何ゆへぞや。神道と云名をだに知人もまれになり、書は故家にかたばかり残れど、我家のかざりとや思ふらん。自も見ず、まして他にも見せず、虫や鼠の巢となりて朽る。か、れば三百年來次第く神地も変じ、伊勢の国司と仰ぐ北畠殿さへ、神領を押領せられしかば、爰もかしこも他より押領しき。それに又豊臣秀吉公の、神徳を重じ給はず、神都をも檢地し給しかば、度会郡さへ半ば他領となりぬ。二所大神宮領もそのかみは、度会・多氣・飯野ぞ神三郡とて神地なりしを、代々の聖主御寄附ゆへ、員弁・三重・安濃・朝明・飯高の五郡も附しかば、神八郡と云、其外諸国にも神戸・封戸・御廚・御園などありしに、今は度会一郡さへ宮川をかざりて他領なり。是にて神威のおとろへもしられぬ。されど世中もしづまりければ、神の威も亦ますにや。^②（陽復記）

ここでは書物の秘匿が、世俗権力の横暴による神宮の衰退と直接関係付けられた上で論じられている点に注目する

べきであろう。総括すれば、聖地の由緒を知り、神聖なものを尊重する心情が欠落すればこそ、強力な武力を背景にした世俗権力が土地を掠めていったとする内容である。由緒に対する無知が蔓延し、神聖性をめぐる秩序が崩壊すれば、伊勢神宮も社会的・経済的な混乱の中に巻き込まれる危険があるのである。書物の内容が人に読まれる機会を提供する事は、尊守されるべき由緒を喧伝し、物事の優先順位を明確にするための基礎を形成するのである。古典籍の閲覧には、神宮の存立を支える心理的な防波堤を築き、政治的かつ経済的にも守っていく効果を生む事が期待されているのである。

しかし、由緒に対する無知がもたらす問題は単に対外的な次元に留まらなかったのである。延佳の危機感とは、神宮の神職達へも向けられており、彼らに対する教育と学問の必要性も強く意識されていたのである。彼に神職達にこそ由緒を学ぶ必要性があると思わせた要因は以下の箇所から窺える。

此書をしるす事は、他境の人の為而已ならず。内外宮の詔刀師の中、殊には旦暮瑞籬の辺に侍ふ神役人の中にも、世を渡るべきことの心ばかりにて、神の有無までは、観察の力もなければ、参詣の諸人をたぶらかして、ま、偽をかまへ正直の教を背き、或は神は無とお

もへど、世を渡る謀に、正しく神のまのあたり御座と、参詣人などには云聞せ、或は神は有とおもへど、広大の神徳なれば、偽でも神職の者には神罰もあたらじとおもふやからも有。……彼明には人を欺き、幽には神をなみする輩、此記を見て、すこしは神を敬ふ心を興起せよかし。……朝暮神に仕奉る神職人、正直の神をなみしてあざむかば、末いかゞあるべきや。(伊勢太神宮神異記)

延佳が宗教的な墮落を真剣に憂えている事が容易に理解出来る箇所である。足下から手前勝手な説を説かれては、正統な教理に対する信頼も神宮の宗教的な威信も喪失する事になる。彼が地元の人々に学問を奨励するべく立ち上がったのは、正にこの様な精神的な墮落傾向を改善するためであったと言える。または、彼らに自分達の精神的な拠り所を再認識し、改めて正統な教説を尊重させる必要性が痛感されていたからとも言える。書物に触れて由緒を学ぶ事は、対外的なアピールのみならず、神職達の間に統一見解を形成するためにも不可欠であったのである。伝統や由緒に安住しているだけでは、時代の変動を乗り越えていく事は出来ない。書物を読み継ぎ、語り継いで世代を越えて継承していかなければ、神聖な権威の所在も時の経過と共に記憶から失われてしまうのである。度会延佳が書籍の蒐

集閲覽と子弟の教育を熱心に行った理由は、このような危機感を前提とすれば一層理解しやすくなる。秩序立った価値体系は、学んで知る機会が与えられなければ崩壊の一途を辿る事になる。延佳が文庫の創設に託した理念は、神宮の由緒を広め、継承し、神宮を中心とした権威の所在を明確にする事であったのである。

第四章 度会延佳の危機感の背景

それでは、延佳の意識を鋭敏にしていた事柄は何であったのか。以下文庫創設以前に延佳達を取り巻いていた状況について傍証として着目できる事を整理していきたい。

度会延佳達が文庫を創設した当時は、徳川幕府が正統性の確立に力を注ぎ、その計画が着実に進められていた点に着目すべきである。ヘルマン・オームスは、徳川幕府初期の將軍達が、主として儀礼的な領域において正統性を確保する努力を払ったと論じているが、彼はまた、その目的を遂行するために、日光を伊勢と同等の位置に昇格させる方策が実施された事を指摘している。²³ オームスは一六四〇年代の中頃から伊勢を日光へ置き換える動きが本格化し始めたと説明した後で、具体例として第一に正保二年（一六四五）には天皇から日光東照社に「宮」という神社の最高の位が

与えられた事実を挙げ、第二に伊勢神宮への例幣使の派遣が再興され、同様に日光へも派遣されるようになった事実の双方を列挙している。²³ 今谷明は、東照大権現が伊勢神宮と並ぶ国家最高格の神になるのは例幣使派遣以降であると指摘するが、これは最高神格の神社が併存する状況が出現した事を意味する。伊勢神宮と日光東照宮の双方へ例幣使が派遣されるようになったのが正保四年（一六四七）の事である。日光東照宮と伊勢神宮が同格に並んだのが豊宮崎文庫の創設の前年に当たる事に留意したい。だが、問題は国内の伝統儀礼の次元に留まらなかったものである。徳川幕府は積極的に対外関係をも利用して正統性の構築を図っていたからである。²⁵

幕府の展開した外交政策の中で、特に注目すべき事は、朝鮮通信使の来日である。特に、寛永一三年（一六三六）と寛永二十年（一六四三）の朝鮮通信使は、日光に参詣しているのである。更に、文庫の創設に一番近い時期に渡来した寛永二十年度の通信使は日光へ鐘を贈呈しているのである。

朝鮮通信使による日光への参詣が及ぼしたインパクトの大きさをロナルド・トビは指摘している。²⁶ 他にも彼は寛永二十年に贈呈された鐘が、それ以降、幕府の威光が国外にまで及んでいる「有形の、書き刻まれた証拠」としての象

微的な役割を果たし、その正当性を明白にする事に寄与したと論じている。²⁷⁾

それでは、朝鮮通信使と伊勢神宮との関わりはどのようなものであったのだろうか。この外交使節団の行路を見ると、彼らが伊勢を通っていない事が明白なのである。²⁸⁾その上、朝鮮通信使は京都で朝廷に正式な訪問をする事も無かったのである。²⁹⁾これは、伊勢神宮が外交儀礼の表舞台に登場する機会が与えられていなかった事を意味すると言える。

以上の様に、日光東照宮が同等に昇格して着実に地歩を固めている最中、伊勢神宮は如何なる現実と直面していたのであろうか。実は、この時期は総位階が中絶していた期間と重なっているのである。総位階とは天皇の即位した折に伊勢神宮の神職が祈禱をし、位階を賜る儀礼である。この総位階が後陽成天皇の即位した天正十五年（一五八七）以来中絶しているのである。度会延佳自身が「陽復記」の中でこの点を指摘している。

……又正権禰宜の位階は、天子御即位の賞に必一級を賜り、御祈の賞など打続の時は、一年に二度も位す、みもて行故に、一禰宜は三位にのほり、正権禰宜は四位まです、みしかども、天正十五年に後陽成院の御代始の賞おこなひ給ひしより、惣位階賜る事も中絶せしかば、この比は正権禰宜ともに五位よりのほる事もな

し。³⁰⁾
（陽復記）

伊勢神宮は人事と儀礼の両面において冷遇されている事が明確に窺える。また、この箇所の前半で延佳は、神宮の本来の姿と儀礼の規模を主張し、再興されたものはその一部分にしか過ぎない事を主張しているのである。再興された例幣使の派遣も部分的な復興として解釈されている。³¹⁾この様に伊勢神宮が困難な状況下にある時に、日光の側には外交使節団の公式参詣や鐘の贈呈までもが行われていたのである。その上に、日光は例幣使の再興等を通して着実に同等の位置に上昇して来たのである。日光と伊勢の間の地位が平等であっても、伊勢の側は依然として不利な情勢に直面していると判断せざるを得ないのである。儀礼の再興は神宮に昔日の栄光への端緒を開きはしたが、同時に新興勢力の出現と強化を招く効果をも生んだのである。儀礼的な復興を延佳が無条件に喜べない理由は明らかである。これは伊勢神宮にとって最高神格の併存という極めて不安定な状況が出現した事を意味するからである。この時点において、両者の間の優劣が不明瞭になる可能性が濃厚であった事を看過するべきではない。

度会延佳の立場を考えると、以上のような現実が、権威の所在不明瞭な非常事態と解釈されたとしても不思議ではない。そして、このような困難な状況下に追い詰められて、

延佳は「自分は何者であるか」と徹底して問い続け、神宮の果たしてきた役割と将来への指針を根底から追究していく方向へ情熱を注いでいったと想定されるべきであろう。延佳の問題意識を研ぎ澄まし、危機感を増幅させ、学問と教育活動へと彼を押し進めていった要因は、日光東照宮昇格をめぐる動向であつたと考えるべきである。そして、日光との併存状況を打開して、優位を神宮の側に確立する文化事業として豊宮崎文庫が創設されたと言う事ができる。この文庫における書物の蒐集閲覧と教育活動には、神宮の由緒を学ぶ機会を内外の人々に与え、確固たる権威の所在を広く喧伝するための目標が秘められていたと想定されるべきである。

総括

以上の点から豊宮崎文庫の創設は、日光東照宮の動向を視野に入れた上で行われたと想定されるべきであろう。それも、幕府が日光東照宮の昇格を通して行つた壮大な正統性構築に対する、神宮の側の文化的な対抗措置であつたのである。日光という強力な競争相手が浮上し、国家最高神格が併存する状況下においては、権威の所在が不明瞭になる恐れがあつた。この事態を深刻に受け止め、度会延佳達

は少しでも伊勢神宮の優位を確保するべく動き始めたのである。彼等は文庫を創設し、最上の権威の所在を喧伝する事により、宗教上の勢力均衡を破り、主導権を握る契機を作つたとも言える。内外の人に書物を解放し、子弟の教育を熱心に行つた理由も、一人でも多くの人に由緒を知らせ、神聖性を承認してもらう目的に拠つて立っているからである。豊宮崎文庫の創設理念は、権威の所在と神聖な由緒を学ぶ機会を与え、世代を越えて継承し、神宮を中心とする広範な支持を獲得する事にあつたと言える。高橋美由紀が指摘しているように、度会延佳が伊勢神宮外宮の神宮の立場からその思想を形成していった以上、他の動向に対する意識も、学問教育に対する姿勢も神宮の将来を危惧したものととなつたのは当然であつたと言うべきであろう。度会延佳の的確な情勢判断が神宮を危機から救つたと言うことも可能である。しかし、ここに注意を払うべき問題が含まれている事に留意するべきである。それは、豊宮崎文庫の目的とした神聖性の承認が、結果として不特定多数の人々の間に権威に対する共通認識を創出する傾向を持つていたという事である。これは、教育を受けた者達が、学んだ事柄を通して如何に知的自己形成を成し遂げていくべきかという問題と共に探究すべきテーマであると考えられる。そしてまた、権威に対する共通認識が、その後如何にして帰属

意識へと精錬されていったのであろうか。以上を今後の課題としていきたい。

註

(1) 豊宮崎文庫の沿革について参照した資料は以下の通りである。

大西源一「旧豊宮崎文庫」(『三重県に於ける主務大臣指定史蹟名勝天然記念物(第一冊)史蹟』三重県、一九三六年所収)。

同著『大神宮史要』(平凡社、一九六〇年)。

『国史大辞典』(吉川弘文館、一九九三年)。

宇治山田市役所編『宇治山田市史』下(国書刊行会、一九八八年)。

「豊宮崎文庫の読書会活動(三重地区)」『図書館界』七一、第十四卷第五号、一九六三年。

鎌田純一「神宮文庫について」『瑞垣』第四二号、一九五九年。

中西正幸「図書館だより——神宮文庫」『学士会会報』第七六九号、一九八五年。

同「神宮文庫」『同朋』第二一二号、一九八〇年。

西川元泰「神宮文庫」(『神宮・明治百年史』下、神宮司庁、一九八八年所収)。

(2) 小野則秋「神社文庫の研究」(『日本文庫史研究』下、臨川書店、一九七九年所収)、二九五—二九六頁。

(3) 同書、二〇三頁。

(4) 「出口延佳神主の事績と学説」(『神道説苑』明治書院、

一九四二年所収)、一四八—一四九頁。

(5) 「度会延佳及び其神学」(『史学雑誌』第十二編第五号)、四八—四九頁。

(6) この様な趣旨の論は、宮崎典也「出口延佳神主伝」『講古会報』第三号(講古会、一九三九年、六一—七頁)、及び、石谷斎藏「出口延佳伝」(『國學院雑誌』第十八卷九号、一九二二年、二七頁)にある。

(7) 「近世の神道思想」『近世神道論・前期国学』日本思想大系三九卷(岩波書店、一九七二年所収、五三一頁)。

(8) 「豊宮崎文庫の創設とその理念」『皇學館大學神道研究所報』第二八号(一九八四年)、九—一〇頁。

(9) 「度会延佳と豊宮崎文庫——延佳の学問形成の淵源について」『神道大系』月報二七号(一九八二年)一〇—一頁。

(10) 「度会延佳と近世神道の成立」『江戸の思想』第一号(ぺりかん社、一九九五年)、一二—六頁。

(11) 「神宮隨筆大成後編」(大神宮叢書第十五卷、臨川書店、一九七六年)、二七三—二七四頁。ここでは、代表して「神境紀談」を引用した。他にも文庫の創設に関して参照した資料は以下の通りである。

「閑際隨筆」「每事問」中卷(『神宮隨筆大成前編』大神宮叢書十四卷、臨川書店、一九七六年)。

「勢州古今名所集」第三卷、「宮川夜話草」卷之一(『前掲大神宮叢書第十五卷所収』)。

「勢陽雜記」三重県郷土資料叢書、第一三集(三重県郷土資料刊行会、一九六八年)。

- 「勢陽五鈴遺響」(五) 度会郡卷之七、三重県郷土資料叢書、第八五集(三重県郷土資料刊行会 一九七八年)。
 「神都春秋」内閣文庫所蔵。
 神宮司庁編「神都名勝志」第三卷、国文学研究資料館所蔵。
 「豊宮崎文庫図説等」国文学研究資料館所蔵。
 (12) 『神宮文庫沿革資料・神宮文庫図書解題 第一篇』(神宮司庁一九三九年所収)、七五頁。
 (13) 『本朝通鑑』首卷(国書刊行会、一九二二年)、一頁。
 (14) ヘルマン・オームス著(黒住真、清水正之、豊澤一、頼住光子訳)『徳川イデオロギー』(ベリカン社、一九九一年)、二七〇頁。
 (15) 「倭姫命世記」跋文『神宮古典籍影印叢刊八 神道五部書』(神宮古典籍影印叢刊編集委員会編、八木書店、一九八四年)、一九五頁。なお、「倭姫命世記」を入手するために延佳達が苦労した逸話は以下の資料にもある。河崎延貞「蟄居紀談」上巻、「宮川夜話草」巻之四(前掲大神宮叢書第十五巻所収)及び、御巫清直「太神宮本記端正鈔」巻第一(『神宮神事考証』大神宮叢書第七巻、神宮司庁、一九三五年所収)。
 (16) 『神宮参拝記大成』大神宮叢書十一巻(臨川書店、一九七六)、三八六頁。
 (17) 前掲、日本思想大系、一〇九—一一〇頁。
 (18) 『度会神道大成後編』大神宮叢書第十七巻(臨川書店、一九七六年)、八二—八三頁。
 (19) 前掲、日本思想大系、九八頁。
- (20) 前掲、大神宮叢書第十一巻、三八八頁。
 (21) 前掲、『徳川イデオロギー』、二二三頁。
 (22) 同書、二三三頁。
 (23) 同書、二三四頁。
 (24) 今谷明『武家と天皇——王権をめぐる相剋』(岩波新書二八六、一九九六年)、一六三頁。同様の指摘は、平井誠二「前期幕藩制と天皇」(『講座前近代の天皇——天皇権力の構造と展開その二』青木書店、一九九三年所収、一五四頁)にも見られる。
 (25) この問題に関してはロナルド・トビ著(速水融、永積洋子、川勝平太訳)『近世日本の国家形成と外交』(創文社、一九九〇年)を参照した。
 (26) 『近世日本の国家形成と外交』八七—八九頁。
 (27) 同書、八九頁。
 (28) 『善隣と友好の記録・大系朝鮮通信使第二巻 丙子寛永度・癸未寛永度』(明石書店、一九九六年)にある旅程を参照した(同書、一八一—一八三頁)。行路図から伊勢を通っていない事が分かる。
 (29) 著者未詳(若松実訳)『癸未東槎日記』(日朝協会愛知県連合会、一九八八年)によると、往路(同書、五五—六一頁)及び復路における京都滞時にも(同書、一三二—一三四頁)天皇を訪問していない事が窺える。ただし、天皇に関する言及は皆無ではない。例えば、明正天皇についての記述があり、年度末には弟に譲位する旨が記されている(同書、五八頁)。なお、朝鮮通信使と天皇の関係は、仲尾宏著「江戸時代の朝鮮通信使と京都」(『朝鮮通信使の軌跡

——増補・前近代の日本と朝鮮³⁰⁾、明石書店、一九九三年所収)、及び同著「朝鮮の日本王権観と通信使の天皇観」(『朝鮮通信使と江戸時代の三都』、明石書店、一九九三年所収)をも参照した。

(30) 前掲、日本思想大系、一一五頁。

(31) 『陽復記』、日本思想大系、一一四—一一五頁。

(32) 『儒家神道における儒教摂取の思想と論理——羅山・延佳・惟足をめぐって』(『日本思想史学』第二二号、一九八九年)、三頁。

(国際基督教大学大学院)